

# 継続調査から明らかになるもの

大阪府守口市立八雲小学校 重松 昭生

どのようなものであれ「調査を受ける」というのは、正直怖いものである。子どもはもちろん教師も総合学力調査となれば、「教師の指導力」が問われるように考えてしまうからである。しかし、結果をそのままにするのではなく「課題を見だし改善につなげるため」と考えると、「子どもの何を育てるか」「指導力発揮のポイントは何か」が、子どもを見つめる教師には見えてくる。

現任校では、今回も4・6年生が受検したが、前回の2003年調査の5年生については6年生の年度末にも同様の調査を実施し、学校や教師の働きかけを子どもたちの成長を鏡に検証することができた。ここでは実践を挟んだ調査結果を一部報告し、継続調査の意義を示してみたい。

まず、5年生時の全般的な傾向を「学力向上のための基本調査2003」の結果からみてみよう。

教科学力は、国語の基礎96.2%、応用・発展88.5%(全国90.3%、79.2%)、いずれも達成率(到達度が目標値を上回った達成者の割合)で全国平均より高いことがわかった。算数で、基礎88.5%、応用・発展65.4%(全国84.7%、67.6%)と応用・発展にや課題が見いだせた。学びの基礎力のスコア(各設問の回答をもとに0~100の範囲で傾向を示したものの、数値が大きい方が望ましい傾向を示す)は、61.4(全国61.6)で、平均のレベルである。生きる力は、61.7(全国58.0)で4ポイント近く平均より高いことがわかった。

この学年を学級減(3クラスから40人学級2クラス)で引き継いだ6年生の教師は、このデータをもう少し詳しく読んでアクションプランを考えた。学びの基礎力の4つの領域のうち平均より低かった「自ら学ぶ力」(本校54.5、全国57.9)の育成を重点課題とするとともに、学級間のばらつきがみられた生きる力に配慮し、総合的な学習の時間を学級の枠を取り払ってテーマ別に編成することにした。年間を通じて木曜日は、総合のグループ(26~27人の少人数)で学習することにしたのである。例えば「River」という名の大きいテーマのグループは、1・2校時は総合を、3・4校時は理科、5・6校時は家庭科の学習をするのである。他の二つのグループも同様に2時間ずつローテーショ

図表1 八雲小学校の児童の「生きる力」の経年変化

生きる力		全国平均 (5年時)	本校		
			5年時	6年時	6年- 5年
問題解決力	課題設定力	60.1	64.1	79.4	15.3
	企画実践力	51.3	61.6	69.2	7.6
	論理的思考力	52.5	51.3	60.2	8.9
	判断力	47.7	46.1	52.6	6.5
	コミュニケーション力	56.9	64.1	71.8	7.7
	メディアリテラシー	69.8	87.2	93.6	6.4
	情報活用力	51.9	76.9	53.9	-23.0
社会的実践力	協調性	68.7	71.8	82.1	10.3
	トラブル解決力	42.4	42.3	33.3	-9.0
	社会対応力	62.6	61.5	75.6	14.1
	共生力	51.9	53.8	47.5	-6.3
豊かな心	責任感	78.6	83.4	91.1	7.7
	創造的態度	60.2	68.0	62.8	-5.2
	楽しむ力	75.1	84.7	79.5	-5.2
	バランス感覚	69.2	74.3	79.5	5.2
自己成長力	自己評価力	63.5	65.4	73.1	7.7
	自尊感情	47.0	44.9	50.0	5.1
	自己実現力	82.0	82.1	92.3	10.2
	進路決定力	63.3	70.5	74.4	3.9

\*「生きる力」項目の詳細については「豊かな学力の確かな育成にむけて」(2003年、ベネッセ教育総研刊)参照

ンする。二人の学級担任は、一日中「総合の少人数指導」にあたったのである。また、子どもたちには「めあてを探そう」と自らの課題とテーマを設定させ、主体的計画的に学習に取り組めるようにした（『学力向上のための基本調査2003』報告書『豊かな学力の確かな育成にむけて』第5章3節「調査項目の多面的な活用—生きる力育成に生かす」p.188～に詳しい）。

さて、この実践を経た子どもたちはどうなったのか、一年後のデータと比べて見てみよう（**図表1**）。生きる力の30項目（今回の調査では20項目に絞られている）について、肯定の割合（「とてもあてはまる」+「まああてはまる」）が、2003年調査より5ポイント以上あがっているものをチェックしてみた。問題解決力の領域では、「課題設定力」15.3△、「企画実践力」7.6△、「論理的思考力」8.9△、「判断力」6.5△、「コミュニケーション力」7.7△、「メディアリテラシー」6.4△と大変な伸びである。社会的実践力の領域「協調性」10.3△、「社会対応力」14.1△、豊かな心の領域「責任感」7.7△、「バランス感覚」5.2△、自己成長力の領域でも「自己評価力」7.7△、「自尊心」5.1△、「自己実現力」10.2△という結果である。子どもの自信や学習活動の成果が、これらの生きる力自己評価に現れたと言える。生きる力を育む総合的な学習の時間のねらいどおりに、一層の充実が図れたことになる。

一方、「怖い」と思ったのは、情報活用力、トラブル解決力、共生力、創造的態度、楽しむ力が、逆にマイナスになったことである。特に情報活用力の23.0▼は、おどろくべきデータである。ここで「言い訳的要因」を明らかにしても仕方ないが、確かに5年生時より情報機器（コンピュータやインターネット、ビデオなど）を使う機会は少なくなった。「インターネットで調べるより、会ってインタビューしてこい」や「ソフトにたよったプレゼンより、紙のパネルの方が説得力がある」等、総合的な学習の時間に教師が強調した場面が思い起こされ、恥ずかしい思いがある。本来この情報活用力は、強調したものも含めた「様々な情報手段の特性を生かす」ことを大切にしなければならなかったが、6年生では子どもの実感として「しほり」があったのだろう。しかし、他のマイナス項目を含め、子ども一人ひとりの学習活動履歴や「ふり返りカード」と個々のデータを合わせてみると「自己評価力」7.7△に行き着いた。つまり、子どもの自己評価力の成長によって、子ども自身が評価のハードルを上げていたことがマイナスの要因でもあることがわかってきた。手前みそだが、うれしい納得でもある。

また、この学年の子どもらが持つ課題が、確かなデータで裏付けられたものもある。学びの基礎力で重点課題とした「自ら学ぶ力」(54.5)は、56.5と2ポイント伸ばしたが、前年の全国57.9には及ばなかった。「新しく習ったことは何度も繰り返し練習する」や「ふだんから計画をたてて勉強する」を課題として、連絡会で中学校に申し送った。

このように調査で得られるデータや知見は、「やったことが明らかになる」ものである。特に全国的な調査であれば、ここでも行ったが「平均値」と比べる手法がよく用いられ、その比較で一喜一憂しがちである。しかし、改善と成果を見る視点で継続して調査を実施すると、学校の取り組みの主体的な評価になる。指導と評価の一体化のためにも、継続は意義深いと言えるだろう。